

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 108 号

2019年 3月



第 162 回自然観察会: 達沢不動滝周辺自然林雪上観察会に参加して 池田恵子

高山の会の皆様、いつもお世話様になっております。

冬の観察会に参加するのは、初めてでした。駐車場では、思い思いの冬のファッション、スノーシューやがんじき、登山靴等、皆さんの装いに見入りました。カラフルな色は、真っ白な雪と抜ける様な青空に、華を添えますね。

なだらかな道を、ゆっくりと歩きました。木の芽をじっくりと見たことはありませんでした。オニグルミとサワグルミの芽は明らかに違います。トチノキの芽はネバネバと光っていました。ウリハダカエデの新芽は赤い！ガマズミの新芽は二つに分かれる！殻はまだ固いけど、生命の力強さを感じました。カンボクの赤い果実、サワシバの果実、ノリウツギの果実と装飾花は冬の山に彩りを付けてくれます。歩き始めて間もなく、対岸の斜面をニホンリスが走っている姿がみられラッキーでした。うさぎや鳥の足跡、犬の様な大きな足跡もありました。雪がとけた道端の土手に、トゲシバリという珍しい地衣類があるよと代表さんが教えてくれました。



この青空はもう春！

目的の達沢の滝は水がきれい！陽も差して虹が出ていました。雄滝と雌滝があり、雄滝の方が大きいのですが、「この会は、逆だなあ」と言っておられました。(笑)

達沢原生林ではあちこちに巨木があり、あまりの大きさに感動しました。昔、木地師が住んでおり、勝手に木を切ることが許されていなかった



雌滝



雄滝

たそうです。大人5人で周囲を囲むコナラの大木、高い枝の間にはコケやサルノコシカケのような大きなキノコまでありました。枝先近くには、熊だながあり、折しも小鳥も飛んできており、私には鳥の巣に見えて、熊？鳥？熊？鳥？頭の中がグルグルになりましたが、青空にそびえ立つ大木を見上げて考えるのをやめました。

木地師という言葉も初めて？きいたので、携帯で調べてみました。「木地師」とは、山に入って木を切り、和製ろくろを使って木からお椀やおぼんといった「木地」を作る職人のこと。歴史は古く平安時代の第55代の天皇の世次の争いに敗れた長男が家臣と供に山に入って作ったのが、始まりと言われています。

さて、お待ちかねの昼食。いつの間にか、雪の特製テーブルが出来ていて、皆で囲む昼食は大家族の様。次から次に料理が回って来て、口に運ぶ暇が無いほど。美味しいバイキングでした。風もなく、雪の上という事を忘れる程、あたたかい食事でした。

今年は今までより参加できると思います。楽しみです。今後とも宜しくお願いいたします。



トチノキ



それぞれに冬芽を観察



雪の大テーブルを囲んで



コナラの大木

春が来ていた ～季節と体1～

土井 昇

達沢の森は晴天の碧と雪の白とのコントラストが美しく、用意して下さったスノーシューを履いて絶好の条件下での観察会。森に入ると、にぎやかにたくさんの芽をつけ、小さな松ボックリを残して落葉松がしんと立っている。代表のお話が始まる。「沢沿いの様な場所は川の氾濫の後、自生している植物たちの繰り返しの歴史がある。けれど戦後の復興期は鉄道インフラの整備が求められ、当時独立採算制であった林野庁は枕木を目的に落葉松やエゾマツなどの植林を進めた。また、民間では家屋の建材用にと沢沿いにスギ、尾根にはアカマツを植林しました」そう聞いて見渡してみると、確かにこの辺りはそうした樹種があちこちに見られる。そこからすぐにマイクロな世界へと視点を移し、冬芽や樹皮を観察し始めた。

コシアブラは円錐で大きい芽を持ち、その下の維管束痕は横長にぐると王冠の様にとり巻いて、なかなかの風格。サワグルミは白い毛筆で青空に伸び、美しく清楚で品がある。サワシバは小さな芽と芽の感覚を充分にとって、わきまえたように散点しており、柔らかそうな苞葉はホップのよう。しっかりとした赤みが愛らしいツノハシバミ。水飴を浴びたように光るトチノキ。細い枝が赤紫に染まって季節を先取りしたようなミズキ。なんだか見ているだけでは勿体なくて、そっと芽を指の腹で押さえてみた。すると、まだ冷たい空気の中でもそこだけほんのり温かい。体温だ！と気づき感激が湧いてくる。生きて動くものの温かさが指を伝わって胸に響いてくるようだ。春が来ている。動いている。

人間の体はどうであろうか。後頭骨が左右に広がり、肩甲骨が外に開き、骨盤も横広になる。四側と呼ぶ背骨から最も遠い体側方の領域が膨らんでくる。目覚めの季節に入っているのだ。内臓からの体液(リンパ)の移動が活発になって筋肉の間隙を伝わり関節で流れが調整される。この時、関節の



観察の起点は杉と河辺林



空気の中でもそこだけほんのり温かい

痛みが出易くなる。立春から春分にかけては骨盤の右から左への働き(左への重心移動)がある。肝臓の働きを誘発することで骨盤の左右のバランスが調整されるが、関節の硬張った拘縮状態があるとホルモンの分泌も悪くなる。これら一連の動きを促すポイントは、なんと手の指の第2関節であるという。冬の突っ立っている立木のような肩をすばめた姿から、春は体に膨らみが出るけれど、身体の変化を季節に順行させるための体操や呼吸がとてとても大切になってくる。加えて心が膨らむような自然への共感、寄り添いにより五感がこぞって向いてくる時間の内に外界との一体感が成就する。もし仮に膨らみに欠けるところがあれば、そこに近い人が手を当てその人と呼吸を合わせていけば欠けた部分にも十分に呼吸の幅が戻ってくる。整体では嬉しい気で相手を包むことを愉気(ゆき)と呼んでいる。今日、この冬芽に共感し皆さんと親しく語らえたのは春のぬくもりを愉気してもらった至福の時。私の身体にも春が来ていて嬉しい気分であんなに楽しかった。

資料の写真と比べると、雪は一週間前からかなり少なくなった。杉や赤松の枝葉、人のかぶった帽子やジャケットなどに、風は透明な糸を引っ掛けたり、引っ張り回したり、叩きつけたりしていたけれど陽射しが強くなるにつれ、冷たい糸はぐんぐん弛んで、あちこちでほどけ、ぷちぷち切れたり、そのまま雪の上に落ちたりした。徐々に温まった雪の結晶たちは気取っていた体をリラックスさせ大きく伸びをする。水の分子が伸ばした手は多くの仲間たちとつながって丸く大きくなって重さに身を委ねていき下の仲間たちと連れ立って沢へと流れていく。沢を下るのはとても楽しいらしく急なところではジェットコースターの様思わず皆大きく歓声を上げてしまし、流れが狭くなってくると次々と岩場をすり抜けながら笑う。くっついたり離れたたりしながらの春の旅・・・。



くっついたり離れたりしながらの春の旅

戻り道ではしみじみ歩く。往路で口に含んで苦みを味わったカンボクの赤い実がところどころにアクセントをつけ、ドライフラワーになったノリウツギは老いながらも貴婦人然としている。私は、おとなし気ではあるが沢山の小さな白い芽が鮮やかなシロヤナギに名残惜しく挨拶して大山祇神社の森へと向かった。

追記：神の森として大切に守り続けてきた木地師の暮らしも時代と共に需要が減り、農家の作業を加えても大変になったので現在は外に働きに出たのだという。土湯峠を越えるのは大変なため多くは会津若松方面に行くと言った。巨木も多くみられたが枯れ木も目立ち、樹上に幾つものヤドリギを見た。生業とのつながりが薄れるにつれこうした風景が広がりつつあるのだろうか。この森を見つめ続けて来た木地師やご家族たちの複雑な思いは計り知れない。

西大巔を中心とする山域の登山道保全に関わる森林管理署への要望活動報告

以下の通り西大巔登山道保全について、関係森林管理署へ要望活動を行いました。

1. 東北森林管理局置賜森林管理署訪問(山形県小国町)

日時 2019年2月1日

出席者 高山の原生林を守る会 佐藤 守、奥田 博、小幡仁子、渡邊アヤ子

2. 関東森林管理局会津森林管理署訪問(福島県会津若松市)

日時 2019年2月15日

出席者 高山の原生林を守る会 佐藤 守、奥田 博、渡邊アヤ子

3. 「吾妻山周辺森林生態系保護地域の保全管理に関する検討会」(山形県米沢市)

日時 2019年2月22日

出席者 高山の原生林を守る会 佐藤 守、奥田 博

要望活動の概要

置賜森林管理署では、西大巔山頂から西吾妻小屋までの山域は関東森林管理局の管轄になるので会津森林管理署にも申し入れが必要であること。新たな検討委員会設置は実現性が困難であるため、置賜森林管理署で主管している「吾妻山周辺森林生態系保護地域の保全管理に関する検討会」で議題化したい旨、回答があった。会津森林管理署では、下記の要望内容を説明し、「吾妻山周辺森林生態系保護地域の保全管理に関する検討会」まで検討していただくようお願いした。

要望内容

1. 西吾妻登山道誘導ロープ設置作業の安全対策（暫定措置）について
安全対策として以下の事項について御検討をお願いします。

- (1) 新しいロープ支柱（鉄杭）及びロープの補充を森林管理署にお願いしたい。
- (2) 変形した支柱（鉄杭）は、森林管理署で矯正できないか検討をお願いしたい。
- (3) 今後は高山の原生林を守る会とNF 米沢のボランティアのみでは作業継続が難しいのは明らかです。作業全行程の安全性を確保しつつ、一般公募等、手法の見直しに関して検討委員会にて審議をお願いしたい。

2. 西大巔～西吾妻小屋間の登山道整備について（恒久措置）

- (1) 最終的にはロープ設置作業等の必要の無い登山道の確立を目指します。
- (2) 西大巔山頂直下の斜面の植生崩壊は危機的状況である（参考資料）。早急に崩壊の抑制措置を講じる必要があり、例えば有識者（専門家）を加えた場での審議をお願いしたい。

「吾妻山周辺森林生態系保護地域の保全管理に関する検討会」での協議概要

高山の原生林を守る会の具体的要望（説明：佐藤 守）

- ① HP 等でボランティアの一般公募等、手法見直しの検討をお願いしたい。
- ② 有識者（専門家）を加えた場での審議をお願いしたい。
- ③ 県境周辺の管理区分が不明確なので、その行政機関間での調整をお願いしたい。

協議内容

- ・山形県：西大巔から西吾妻小屋までの区間の登山道の管理分担は米沢市。従って県として助成は不可能
- ・米沢市：市としては、現場確認後に検討したい。
- ・置賜森林管理署：登山道に関しては県・市の担当と認識している。森林管理署は植生保護という見地で事業に取り組んでいる。主導的立場の環境省抜きでは事は始まらない。環境省と連絡を取りながら進めたい。
- ・会津森林管理署：登山道に関しては、環境省および上部機関である関東森林管理局とも情報交換している。恒久策に関して、簡単ではないので、環境省主導による仕切りを期待したい。

齋藤員郎山形大学名誉教授：まさに管理責任不在の典型で行政の怠慢だ。たらい回しで、なぜそのまま放置するのか？登山道のみ問題として処理するには無理がある。国有林としての危機と考えるべき事態だ。登山者の通過が原因なので、登山道を閉鎖して、その間に方策を考える、登山道が成立つことを考えるべきである。予算化を待っている内に、どんどん崩壊は広がるだろう。森林管理署は環境省に登山道を付け替える提案をして欲しい。国有林管理者が先導して実施して欲しい。

青柳和良 NF 米沢代表：行政担当・垣根が自然を破壊している。手をこまねいている時間はない。是非、本質的な部分で議論を重ねて欲しい。西大巔崩壊に関しては、登山道閉鎖の上、抜本的な例えば金属製ネットなどで動かないようにする方策もありうる。

置賜森林管理署阿部進森林管理官：今後、関係機関と情報交換しながら、取り組んでいきたい。ボランティア公募に関しては、ホームページ公開を両森林管理署でアップする（ひな型は高山の原生林を守る会から送る）

齋藤山形大学名誉教授：鉄製ネットなどは造らず、現登山道を閉鎖し、稜線に道を移し替えた方が良い。湿原保全のための手法は技術的に確立されているので、その方が現実的である。

奥田博：以前の検討会で県境付近に道の付け替え提案した経緯がある

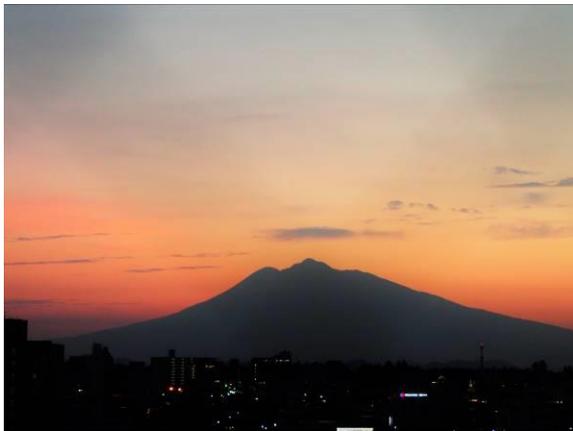
置賜森林管理署佐藤宏一所長：西大巔を訪れて感じたことを齋藤先生にズバリ言われて改めて感じた。重く受け止め上部に伝える。

今後について

今回の取り組みにより、行政機関の対応が進む兆しが見えますが、より確実にするため関東森林管理局および日本自然保護協会への申し入れを行う予定です。

「おい、そりゃ図々しすぎるよ、俺恥ずかしくてそんな事できないよ」、「大丈夫、大丈夫、日曜日はお弁当作れないんだから(家人は観察会の前日から用事で留守することになっている)。大丈夫だってお昼ご飯は、今回もきっと素敵なメニューがいっぱいだから、心配ない！」俺だってあんたの作る弁当、期待しているわけじゃないと叫びたかったが、その言葉をぐっと呑み込み、「そうは言っても、図々しすぎるよ、おにぎり二つだけ持って、あの豪華なランチに参加するなんて・・・」と小さな声で訴えたが、「いつもじゃないですか御相伴にあずかるのは、だから大丈夫、勇気を持って行きなさい。行けば今回もまた楽しいに決まってるんだから」と返された。そりゃあんたはいつも「美味しかった、とても美味しかった」と言って帰ってくるけど、今回は俺ひとり。あの豪華な食事に手を出せるかなあとも思ったのもそこまで、あの楽しい山歩きを思うと「うんそうかよし分かった、料理が回ってきたら、目立たないようにそうっと手を出し頂いて、またたらふく食べてくる」と決意を述べた、妻に「感謝の気持ちも忘れずにね」などと、妙な励ましを受けて、おにぎり二個と少々の嗜好品を入れた空っぽのリュックを背負い参加したのです。そして決心後の私の心配は、妻との会話などすっかり忘れて、どこのコンビニのおにぎりが、一番美味しいのかということだけでした。

以上昨年ひとりで参加した観察会での思い出話をしたところで、とは言ってもいくら高山の会が、美味しいもの



のを食して、森に咲く花や木々を愛でながらノンビリ歩く観察会だといっても、何時間かは山道を歩くのだから、途中でバテてみんなに迷惑をかけては申し訳ないということで、昨年体力強化のため自主トレをすることにした。本棚から、山の本を引っ張り出し、俺でも登れる山はないものかと探してみると、あった、ありました、理想の山が。8合目までバスで行き、そこから9合目まではリフト、後40分歩けば天下の名峰岩木山の頂上。津軽には何度も旅をしていて、その度に津軽平野から眺める岩木山(津軽富士)には憧れていた。その憧れの津軽富士に登れるとは嬉しいかぎり。古いガイドブックには40分どころか20分で頂上に着けるとある。これなら20分では無理だろうが1時間

間もかければ、俺でも登れるだろうと考えたのが間違いの元、なんと一時間半もかかってしまった。

大きな岩のガラゴロした急登の荒れ道に、首に下げているカメラをザックにしまい、杖をたまたみザックに縛り付け、やっとの思いで頂上にたどり着いたときには、わが身はヨレヨレヘロヘロ、膝はガクガク倒れる寸前だった。ハイヒールでは無理だがスニーカーとジーパンで気軽に登れる日本百名山との甘い言葉に誘惑された自分の愚かさ、体力のなさを痛感させられた。だがこのように登山は難行苦行も強いられるが、その分喜びも大きい。独立峰の岩木山からの眺めは格別で、霞んで北海道は見えなかったものの、日本海、白神山地、そして津軽平野の向こうに八甲田山と見飽きることはなかった。もう二度と来ることができないと痛感したほど苦しかったが、後悔はなく、心は達成感にあふれ、これで高山の会の観察会にも何とかついて行けるかもしれないとチョッピリ自信もついた。



そんな時頂上で、ひとりの女性登山者から声をかけられた。「写真撮りましょうか？」いつも単独行で、自分の写真は少ない。「ハイお願いします」と言ってシャッターを押してもらった。その中年女性はひとりで埼玉から車を運転して、麓の岳温泉から歩いて登ったそうで、リフトを使って登ってきた、私のようなヘナチョコ登山者とは違う。「福島にもいい山がたくさんありますよ」と言うと、それじゃ帰りに高速を途中で降りて、登っていきますと言うと、彼女は颯爽と頂上を後にした。「女は強えな」と私は思わず呟いた。そういえば我が高山の会の女性会員の中にも、外国の山を登頂したり、百名山を踏破した猛者がいるという、あらためてもう一度思う。女は強い。そして動植物に関する知識の豊富さ、自然に対する感受性の強さにもいつも感服させられている。

「冬芽ハンドブック」という図鑑を買ってからずいぶんになる。あれは確か高山の会の観察会で、Kさんがネジキの冬芽を見て「ほら、ネジキの冬芽は小人の兵隊さんみたいに見えるよ。かわいいね」と言うのを聞いて、冬芽に興味をわいて購入したのだった。

開いてみると、「冬芽を見て何の木か分かったときは本当に嬉しい」とか「冬芽によって新しい世界が開けてくる」と書いてあった。その頃は、花や葉っぱがないとその植物が何なのかが分からなかった。冬芽だけでは見当が付かず、ふ～ん、そうなのか。新しい世界が開けるって本当かなあというくらいの感覚でいた。

鹿狼山にはもちろんネジキの他に色々な木がある。春夏秋冬、暇があるときは鹿狼山に登っているから、何とはなしにネジキの他にも色々な木の冬芽が分かるようにはなってきた。冬芽でかわいいのはガマズミだ。これは、芽鱗が毛で覆われていて、枝にも毛が密生している。両手を挙げてバンザイをしている人形のようなのだ。ちなみにこの毛が陽に透かされて金色に輝くととても美しい。ガマズミだけでなく、モヤッと毛に覆われている冬芽は多いが、暖かそうで冬らしくて良いと思う。

右下の写真はマンサクの冬芽で、先端が葉芽、下を向いているのが花芽である。何か四つ足動物のようなユーモラスな形になっている。先日の観察会で見たハルニレの冬芽は、芽鱗が着物の襟が何枚も重なったようだったし、葉痕は図鑑の説明で言えば「やんちゃ坊主の顔」に見える。ということで、本当にそう見えるのか、みんなでワイワイ言いながら観察して楽しかった。

当たり前のことだが、植物毎に冬芽も違っている。フワフワ毛をまとっているもの、蠟を塗ったようにツルツルしたものもある。この小さな冬芽の中に花や葉っぱが潜んでいて、春になると芽鱗を脱いで伸びてくるわけである。すごいなあ、良くできているなあと感心する。開きかけのマンサクの蕾を見たことがあるが、あの黄色い花びらがきれいに畳まれてあった。非常に効率よく蕾の中に収まっているのである。

3月17日に岩手県西和賀町のカタクリの会第339回生奥羽自然観察会に参加した。今回は「ハンノキの仲間をよく観察しよう」という事で、タニガワハンノキとハンノキの違いなどをよく説明していただいた。途中でマタタビとサルナシの枝が回ってきた。枝は髓の違いが分かるように切ってあった。私はこれから冬芽はどうなるのかなと思ってザックに入れて家に持ち帰り、花瓶に挿しておいた。5日後にどうなっているかを見てみた。どちらもマタタビ科マタタビ属である。マタタビの冬芽は枝の中に半分埋もれ(半陰芽)。冬芽の先だけ少し見える。それは5日立っても変わらなかった。ところがサルナシの方は葉痕上部を突き破って冬芽が出てきていたのである。確か持ってきた時には

冬芽は全然見えなかった気がするんだけど。う～ん、恐るべし冬芽。本当に突き破っているよ！

(2019/03/24 記)



ネジキの冬芽



ガマズミの冬芽



マンサク冬芽



マタタビの冬芽



サルナシの冬芽

シロヤナギ (*Salix jessoensis* ヤナギ科ヤナギ属)

吾妻・安達太良連峰のブナ林からコナラ林までの河川沿いに植生する落葉広葉樹。河辺林を代表するヤナギである。ユビソヤナギが植生する流域ではユビソヤナギが水際の転石帯に植生するのに対しシロヤナギはそれより上部の砂礫地に植生する。樹高は20mに達し、オノエヤナギ、バッコヤナギより高木となる。バッコヤナギ→オノエヤナギ→シロヤナギの順に植生地の湿性度が高まるようである。樹皮は短冊状に剥皮するので主幹の様相からも他のヤナギ類と識別できる。雌雄異株。

葉は互生で葉の形は細長く先端は尖り、葉縁には先の尖った鋸歯がある。表面は光沢が有る。若い葉の葉縁は巻かない。裏面は粉白色で絹毛が密生する。葉柄は軟毛が生え、托葉は小さい。

花芽は腋生、花は花弁とガクを欠く裸花が集合した穂状花序である。雄花は有柄で白毛に覆われ小葉はオノエヤナギより大きい。花穂はオノエヤナギより細長い。雄しべは2個。花糸は離生し基部に黄色の腺体が2個ある。葯は黄色である。雌花の子房には白い軟毛が密生する。腺体は1個。柱頭は黄白色～緑白色で反り返る。バッコヤナギ、オノエヤナギは葉の展開よりも開花が早い、シロヤナギの開花期はバッコヤナギ、オノエヤナギよりも5～7日程度遅く、葉の展開と同時に開花する。開花した雄株は樹全体が明るい黄緑色に包まれ優美である。

森林生態系保護地域指定に向けた中吾妻踏査で初めてシロヤナギの存在を知った。その後、樹高4m程度まで育ったシロヤナギが倒れているのに遭遇した。それから数年後にその倒れた樹の地際から幹が伸長し、立派な樹冠を形成していた。その姿からは倒木の過去は想像できない。シロヤナギの再生力の強さを見た思いがした。シロヤナギの分布域は広く、高山を水源とする荒川下流域には大木が点在している。シロヤナギの種子が宙を舞う姿を見たのがきっかけで柳絮(りゅうじょ)という言葉を知った。



シロヤナギ(雌花)



シロヤナギ雌花花序と花柄葉

メギ (*Berberis thunbergii* メギ科メギ属)

吾妻・安達太良連峰のコナラ林のやや湿った林床に植生する落葉低木。枝や根の煎じ液は黄色で抗菌作用があることから目薬として用いられたのが樹木名の由来である。また、メギ属の学名から命名されたベルベリン(アルカロイド)という成分を含み、整腸薬として用いられる。境植、生垣用として山採りされたためか、群落は少ない。近縁種にヒロハヘビノボラズがある。

葉は互生。長枝と短枝があり、短枝では束生する。葉形は倒卵形～楕円形で葉縁は全縁で滑らか。葉裏は白色を帯びる。枝の各節に葉が変形した刺が着生する。コトリマラズ、コトリスワラズ、ヨロイドオシの別名がある。

花は腋生。葉腋部から総状花序を形成し、小壺の様な花を数輪、下向きに着生する。一見、合弁花に見えるが離弁花である。3数性で花弁、ガク片ともに6枚。ガク片は緑白色、花弁は黄白色である。花弁の基部に大きな黄色の蜜腺が2個ずつ付く。雄しべは6個、葯は赤みを帯び花糸に内着しその先に2個の弁がある。開葯は同科のサンカヨウと同じ仕組みである。雌しべは円筒形。柱頭は緑色、大きな円盤形で目立つ。ガク片は3個ずつが2層になり6個付く。内側の3個は花弁より大きく同形で、外側のガク片は小さい。開花時に花弁に触れると内側に曲がる内曲運動を起こす。



ヒロハヘビノボラズ



数年前に岳友と花を求めて不忘山に登った際に、鋭い刺と刺状の鋸歯を着けた枝葉を持つヒロハヘビノボラズに出会った。下から覗くと黄色い小壺の様な花のツリーが下がっていた。その姿は見たことのない美しさであった。その後、吾妻山麓の湿性地で似たような刺を着けているが葉には鋸歯が無いメギを見つけた。翌年、花時を予測して訪れたところヒロハヘビノボラズより清楚な花が開いていた。

第163回自然観察会案内：茶臼森山・裏花見山のスプリングエフェメラル観察会

日時：2019年4月14日（日）7:30～15:30

集合場所 茶屋沼駐車場 集合時間 7:30 参加定員 20名

内容 人気の花見山ですが、隠れた裏花見山のスプリングエフェメラルたちを観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋(軍手複数)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用:保険代(500円)

申し込み:4月13日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

第164回自然観察会案内：吾妻小屋-鳥子平湿原植物と亜高山植物観察会

(スカイラインが閉鎖の場合は、ブナっ子路・土湯峠湿原遊歩道に変更の予定です)

日時：2019年6月2日（日）7:30～15:30

集合場所 四季の里交差点正面入り口駐車場 集合時間 7:30 参加定員 20名

内容 フイトンチッドあふれる初夏のアオモリドマツ林を散策します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋(軍手複数)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用:保険代(500円)

申し込み:6月1日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

西吾妻登山道誘導ロープ設置ボランティア(NF 米沢と共同:詳細は佐藤守まで)

1. 実施日:6月15日(土)6時30分～17時30分(雨天時6月16日に順延)

2. 定員 :10名(山岳での行動において自己管理のできる方)

3. 内容 :西大巓山頂から西吾妻小屋までの誘導ロープの設置作業を行います。

4. 集合場所・四季の里交差点正面入り口駐車場 6時30分

5. 申し込み:6月14日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

信夫山再生計画と信夫山の自然を守る会の発足について

1/29に「市民シンポジウム・遊びつくせ！信夫山」(主催 福島みらい研究会、NPO 法人ストリートふくしま)と題するシンポジウムが開催されました。再生計画については全く触れない内容でした。しかし、信夫山を観光地化する再生計画が進行しています。計画の中心は六供集落・御神坂地区の開発で六供集落入り口広場にトレーラハウスやコンテナ、ジップラインを設置、周辺に駐車場を整備(おそらく仮置き場跡地を予定)し25万人の観光客誘致を目指す内容です。重大なのは地元住民には全く説明がないまま進んでいることです。これを心配した地元住民が中心になり2/22に「信夫山の自然を守る会」(代表 春山哲郎氏)が発足し、2/26に市公園緑地課に市長宛の「信夫山再生計画中止要望書」を提出しております。この要望書には当会会員2名も連名に加わっています。3/18に「信夫山再生計画を考える集い」を11名(当会から5名参加)の参加により開催し、再生計画の問題点について話し合い、現地調査を実施しました。高山の原生林を守る会・幹事一同は積極的に「信夫山の自然を守る会」の活動に参加していく方針です。西大巓登山道保全問題への取り組みと併せて、会員皆様のご理解とご協力を賜りますよう宜しくお願いします。

振込による会費の納入は、郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第108号 2019年3月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP:<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時～9時)

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(1000円)を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・小幡